

## 第16回名古屋大学博物館特別展「大モンゴル展」の導入パネル記録

### Record of introductory panels of the 16<sup>th</sup> NUM Special Exhibition “Mongolia the great”

足立 守 (ADACHI Mamoru)

名古屋大学博物館  
The Nagoya University Museum

場所：名古屋大学博物館（古川記念館）2階玄関ロビー  
会期：2012年3月17日（土）～8月31日（金）  
主催：名古屋大学博物館  
共催：モンゴル科学技術大学  
後援：文部科学省、経済産業省資源エネルギー庁、モンゴル国教育文化科学省、  
駐日本モンゴル国大使館

2012年3月17日から8月31日まで、第16回名古屋大学博物館特別展として、「大モンゴル展 Mongolia the great」が開催された（担当は東田和弘博物館准教授）。会期前半の展示は、主にモンゴルの自然・資源・環境問題、後半はモンゴルの伝統文化に焦点を当てたものであった。この「大モンゴル展」の導入部に、幕末から明治に活躍した榎本武揚を取り上げ、8枚の解説パネルを作成し展示した。榎本を取り上げた理由は、彼が今から130年以上も前にモンゴルに着目し、1878年（明治11年）、ロシアの首都ペテルブルグからシベリアを横断して帰国する途中に、モンゴル北部の現地調査を行った最初の日本人であったからである。

モンゴル関連の展示に榎本武揚が登場することはこれまでなかったと思われるので、8枚の解説パネルのうち本号の醍醐龍馬氏の報告と重複が多いシベリア横断ルート図など3枚を割愛し、残りの5枚を記録として残すことにする。榎本が『シベリア日記』の中に書き残した地質学的な観察事項の解釈にあたっては、講談社編（2008）の『榎本武揚 シベリア日記』を参考にした。

パネル作成にあたって、榎本武揚の曾孫で東京農業大学客員教授の榎本隆充氏からは貴重な資料の提供を、大阪大学大学院法学研究科の醍醐龍馬氏からは示唆に富むご助言を、愛知大学の加藤詔士教授（名古屋大学名誉教授）からは奈良坂源一郎が創設した「愛知教育博物館」への義捐金拠出者リストについてご教示をいただいた。この場を借りて三氏に厚くお礼申し上げる。

なお、大モンゴル展会期中の6月16日（土）には、榎本隆充氏による「子孫の語る榎本武揚」と醍醐龍馬氏による「榎本武揚が見た露清関係とモンゴル：シベリア日記を中心にして」の連続講演が行われ、多くの聴衆を魅了した。

えのもと たけ あき

## 榎本武揚：モンゴルに着目した最初の日本人

(1836年～1908年)  
天保7年 明治41年



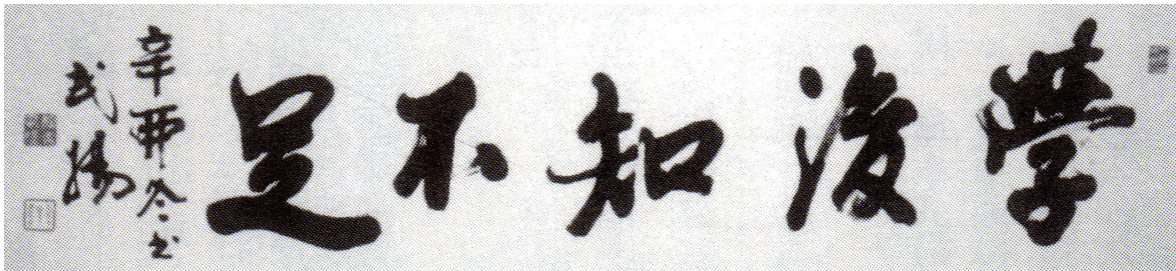
(榎本隆充氏所蔵)

逓信大臣、文部大臣、外務大臣、農商務大臣  
などを歴任

(表の赤字は名古屋大学関係者との関わりがある項目)

- ・1850-1853年 昌平坂学問所で学ぶ
- ・1854年 樺太(サハリン)の調査
- ・1863-1867年 オランダ留学(海の国際法規と外交、航海技術、化学、鉱物学、地質学等を修得)
- ・1868-1869年 箱館戦争敗北(五稜郭を明け渡し、東京で入牢)
- ・1872-1873年 開拓使で北海道の資源調査(石油、石炭、鉄など; 石狩炭田の発見)
- ・1874-1875年 ロシア国特命全権公使(樺太・千島交換条約の締結)
- ・1878年 約2ヶ月かけてシベリアを横断し帰国(途中でモンゴル調査も行う; **シベリア日記**)
- ・1879年 東京地学協会の設立(副社長に就任)
- ・1882-1885年 清国特命全権公使(天津条約調印)
- ・1888年 日本電気学会の設立(初代会長)
- ・1891年 東京農業大学を創設、大津事件の解決に奔走
- ・1893年 **奈良坂源一郎の愛知教育博物館設立にあたり義捐金25円の寄付**
- ・1897年 足尾銅山鉱毒事件の責任をとり、農商務大臣を辞す(**鉱毒事件の調査委員として、旧知の後藤新平を招聘**)
- ・1898年 白萩隕石で流星刀を作らせる  
工業化学会の設立(初代会長)

## 学問に謙虚であった榎本武揚



(東京農業大学所蔵)

榎本は知的好奇心が旺盛で様々な分野の学問を学んだが、学問に対して常に謙虚で、学問の奥深さをよく理解していた。「学びて後足らざるを知る」という榎本が好んだ言葉には、学問に対する彼の正直な感想が込められている。1879年に東京地学協会、1888年に日本電気学会、1898年に工業化学会を設立、さらに1891年に東京農業大学を創設するなど、学問を大事にする彼のスタンスがよく現れている。榎本がいろいろな学問にふれる事ができたのは、好奇心とともに彼の抜群の語学力である。彼はオランダ語、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語などが使えたので、原書から多くの知識を得ることができたと思われる。

榎本は富山県で発見された白萩鉄隕石が国外へ流出するのを防いだだけでなく、この鉄隕石から日本刀(流星刀)を作らせている。榎本が1898年にまとめた流星刀に関する記録(流星刀記事)は、隕石に関する立派な論文である。

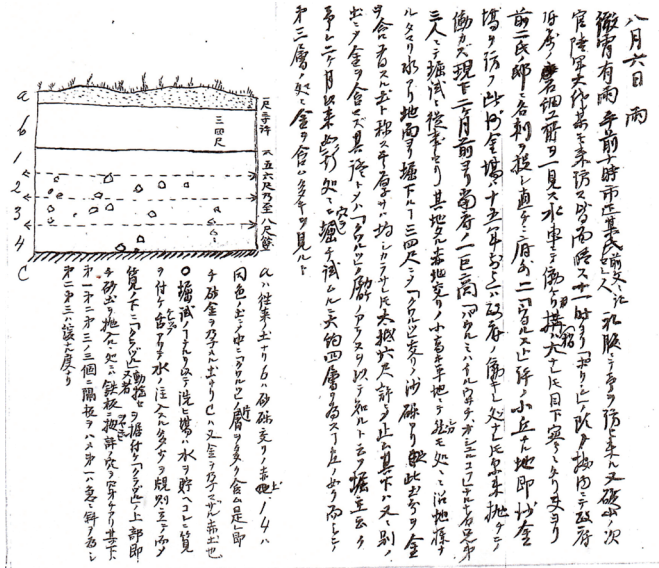
## 榎本武揚とシベリア日記

シベリア日記は、榎本が1878年7月26日～9月28日にシベリアの大地を旅行した際の体験を書き記した日記で、大小2冊(大型帳は縦=22cm、横=18cm、厚さ=2.5cm; 小型帳は縦=6cm、横=11cm、厚さ=1.2cm)からなっている。

ただのメモ代わりの日記ではなく、旅行中に見た風景、地形、地質、植物、動物、訪れた町の名前、気温、人口、治安、軍隊の配置、建物の作り、作物、物価、食事の内容、会った人物とその性格など、自身の観察に基づく様々なことが的確に書かれている。榎本の観察眼の鋭さや旅行に対するスタンス、さらに明治初期のシベリアの様子もよく分かる。

榎本は8月30日にイルクーツクを出て9月6日にチタに到着しているので、この間に、ロシアと清との国境の町キャフタに滞在、さらに国境を越え清の領土(買売城=マイマチン; 現在のモンゴル最北部)に入り、モンゴル人(ブリヤート人)の言葉、食べ物、宗教、習慣などを詳しく書き残している。約30の言葉について、日本語とモンゴル語の対照表も作成している。

こうしたことから、榎本武揚はモンゴルに注目し現地調査を行った最初の日本人と言える。



榎本武揚のシベリア日記(国立国会図書館所蔵)の一部。大型帳に書かれた8月6日の砂金場についての記録とスケッチ。日記の中でこうしたスケッチは極めてまれ。

## 榎本武揚は日本初の地質学者！

榎本武揚は開拓使時代(お雇い外国人地質技師ライマンが来る前)に、日本人だけで北海道の本格的な地質調査を行って石炭層等を発見している。シベリア日記では随所に地質学者榎本の行動と観察力が見て取れる。1878年8月3日には、石炭が多く産出するペルミで地質図(Geological map: 原文ではゼオロヂカルマップ)を入手している。8月6日には、砂金を含む層の特徴を分かりやすい地質断面スケッチとともに、砂金を含む層の特徴としてクワルツ(石英=クォーツ, Quartz)の粒子が多く含まれることを指摘している。

8月29日には、1860年のイルクーツク地震についてふれ、今でも年2-3回の地震があると書いている。8月30日には、バイカル湖畔の急峻な山が火山性(原文ではフヒルカニーセ)であること、9月1日には山の形から、火山円錐丘(Volcanic cone、原文ではコニカル状をなせる旧火山)の存在を記録している。下の写真はモンゴル北部の第四紀の火山円錐丘であるが、榎本がバイカル湖畔で見た火山円錐丘も類似のものと思われる。

9月16日には、アムール河岸の岩が砂岩(原文ではサンドストーン)または礫岩(原文ではコングロメラート)でできていると書いている。9月20日には、ヒルガン峡で望遠鏡を通して見た岩が砂岩(原文ではサンドストーン)および粘板岩(原文ではクレイスレート)に似ているが、花崗岩(原文ではガラニート)や玄武岩(原文ではバザルト)や溶岩(原文ではラハ)は見かけないと書いている。



モンゴル北部の火山円錐丘

旅をしながら短時間でシベリア各地の地質についての的確な観察をして専門語を使い分けていることは、榎本の地質学全般の知識が高かったことを示している。イルクーツクでは、砂金の精錬法についても詳しく書き留めている。こうしたことから、榎本が日本初の地質学者であったと言っても過言ではない。

## 博物館が好きだった榎本武揚

榎本は地質や鉱物だけでなく、動物・植物、さらには自然そのもの、つまり博物学に大きな興味があり、訪れた町の博物館を見学している。1878年7月28日にはモスクワの民俗博物館を、8月29日にはイルクーツクの博物館でシベリアの鉱物・鳥・昆虫・動物を見学している。

彼の博物学や博物館への深い理解が、愛知医学校(名古屋大学医学部の前身)教諭の奈良坂源一郎が1892(明治25)年に設立した『愛知教育博物館』への援助(右の表参照)や、白萩鉄隕石から流星刀の制作につながったと考えられる。

### 流星刀

榎本が1890年に富山県の上市川で見つけた白萩鉄隕石を使って、東京の刀工岡吉国宗に作らせた刀。長刀・短刀合計五振が制作され、そのうち長刀一振は当時の皇太子(後の大正天皇)に献上された。

自然科学に興味を持っていた榎本は、この鉄隕石を化学分析させ、ニッケルが9.3%(右の分析値)含まれていることを明らかにし、流星刀の記事の中で外国の鉄隕石との比較を行っている(隕石に関する日本最初に近い学術論文、1898年)。



(榎本隆充氏所蔵)

愛知教育博物館設立ニ  
付該費義捐金名古屋  
市外諸氏姓名一覽表

●他府縣之部

金百圓	徳川 侯
金五十圓	大谷 派
金三十圓	川 本
金三十圓	原 中
金三十圓	黒 亮
金二十圓	木 三
金二十圓	黒 少
金二十圓	勝 木
金二十圓	大 塚
金十圓	森 正
金十圓	水 野
金十圓	金 道

右者明治廿六年 月調査ニ係ル

(加藤詔士氏所蔵の一覽表の一部)

右之通條也  
明治三十年三月三日

右分析者 小手技師

鉄	八九・四六七
錫	九・三〇三
銅	〇・〇一一
コバルト	〇・〇一三
燐	〇・〇二七
硫黄	〇・〇六四
炭素	〇・〇〇一
不溶残渣	〇・〇一九
不溶残渣	〇・〇二七

定量分析成績  
百分中

(榎本武揚の流星刀の記事を次男春之助が写したもの)

(2012年10月15日受付)